
もどきども 第一話「vs.いやがるサキュバス」

維川 千四号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もどきども 第一話「vs・いやがるサキュバス」

【Zコード】

Z3068L

【作者名】

維川 千四号

【あらすじ】

現代活劇ファンタジー“もどき”第一弾。

今回の対戦相手は「夢魔・サキュバス」。

しかし、妖艶・好色のサキュバスが“いやがる”とは、これ如何に。

序

「ねえ、お願い。なんでもするから。なんでもしてあげるから。だからお願い、殺さないで」

「…………」

そんな言葉を無視して一步一歩、跪く彼女に近づく。

「嫌、来ないでよ。私はまだ、死にたくない まだ消えたくない

「…………」

涙を流す彼女の目の前で立ち止まり、音もなく右手を振り上げる。
「やめて、やめてよ。冗談でしょ？ 私を斬るの？ そんな刃で、
そんな刃で」

流れていたことがまるで見間違いのように彼女の涙が止まり、その瞳に明確な殺意が宿った。そして、

「そんな綺麗な刃を、この私に見せつけないでよ！」
ヒステリックに叫びながら、彼女が飛びかかってきた

飛びかかるうとした。

「へえ。お前には、そう見えるのか」

そう言って、オレは結城真実を斬り下ろした。

序（後書き）

はじめまして。

小説初心者の、千四号チヨウジヤウと申します。

なにぶん初心者の下手くそなので、非常に拙い文章ですが、楽し

んで頂けたら嬉しいです。

感想や批評を頂けたら、尚嬉しいです。

* 起*(前書き)

4 -
2 -
1 < -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- ->
- i
- 1
- 3
- 2
- 0
- 3
—
1

起

ふすまを勢いよく開け放ち、オレは部屋に入る。そして、
「起きる、ヴィアン。朝飯だ」
目の前に敷かれた布団に声を掛ける。
すると、モゾモゾと少しだけ布団が動き、
「うーん……あと五分……」
と、その中から男の声が返ってくる。
「それはイイ歳の大人が言つ台詞じゃねえ」
「うーん……僕には構わぬ、君は先に行くんだ……」
「それはイイ歳の大人が言つべき台詞だが、ここで言つた。戦場で
言え」
「…………」
イラツ。
「……グッドモーニン、グ！」
おそらく腹部があるだろう場所に、オレは鋭い右ローキックをブ
レゼントする。
「痛いっ！」
見事に決まったプレゼントを受け取りながらも、ヴィアンも布団
も大した変化はなく、依然布団の中から、
「いきなり蹴るなんてひどいじゃないか」と、文句が返ってきた。
「いきなりじゃねえよ。ちゃんとアイサツしただろ」
「君は何か勘違いしている。グッドモーニングは『これから蹴りま
すよ』の言葉じゃない」
「確かにそうだ。」
「確かにそうだ。」
確かに“宣言”は大事だ。
なので、

「――れかーら蹴ーりまーす」

今度はサッカーアニメのシューートのよつて、高らかに右足を後ろに振り上げて

「タイム、タイム、タイム！ 今出るから。今まさに出るから。言われた通り、彼をゴールに叩き込むことをやめた。

オレはルールを守る男だから。

「…………」

「…………」

しかし、目の前の布団の塊に変化はない。ヴィアンはルールを守らなかった。

なので、きちんとしたペナルティを、あらかじめ持っていたソレを、少しだけ掛け布団を持ち上げ、

「……プレゼントフォーコー」

中に素早く放り込んだ。

するとすぐさま、

「ギニヤアアアアアアツ！！」

爽やかな朝に似つかわしくない絶叫と共に、彼は布団の中から転がり出てきた。

「おう、やつと出てきたか

「き、君は何でモノを投げ込むんだ！ 鬼か、君は…？」

涙目で、まるでオレが非道をしたかのように、ヴィアンが訴えてきた。

そんな彼に、

「ただの銀の十字架を投げ込んだだけじゃねえかよ。それに“鬼”はお前だ」

オレは誠意を持つて対応する。

「じ、十字架だなんて……神社の息子がそんなモノを持つていてイイと思つていいのかい！」

「いいんだよ、別に。この国には八百万もカミサマがいるんだから、一人二人増えたって分かんねえし。それに、誰を信じようとオレの

勝手だし

「なんて不信心な発言だい……それに、君はカミサマ信じているのかい？」

「いーや、全然。会つたこともねえ奴、信じるわけねえだろ」

「うわ。神社の息子としては、ことごとく不信心な発言だね」

「ついでに言うと、毎日会つてもお前のことは全く信じてねえから」

「うわ。ついでにひどいことを言つね、君は」

「んじゃ、さらこひどいこと言われる前にさつさと飯に来い」

「はいはーい。今日の朝ご飯は何かなあ？」

とても親切なオレは、ここいらで自己紹介と状況説明をしておくことにする まあ、自己紹介はともかく、純和風家屋の一室の食卓で長身の外国人が隣で納豆を美味そうに食っている状況は、是非とも説明するべきだらう。ていうか、説明させてくれ。

オレの名前は薄原智流。すずきはらちとる 津々浦町民であると同時に津々浦第一高校（通称・津々高）の二年生でもある男子だ。

ちなみに、第一と付いているが第一高校は存在しない。その理由は誰にも分からず、津々高七不思議の一つとなつていて……まあ、あくまで余談だけ。ていうか、学校 자체が七不思議の一つってのは、どうかと思うけど。

で、自己紹介を続けると、実家は夢守神社^{ゆめもり} つていう意外と由緒ある（らしこ）神社で、オレはその次期神主もある。ま、当分先の話だけど ていうか、本当は継ぎたくないんだけど、こんな不満を言ったところでなんの解決にもならないし、それどころか問題が増えるということは春休みに“死ぬほど”経験したので、これ以上は言わないでおく。

呼んで字の如く『夢を守る』夢守神社。悪夢で悩む人、不眠症で悩む人、そのほか夢や眠り、そして心の問題で悩む人が全国からや

つてくる、知る人ぞ知る神社。

その神社の長男が、このオレだ。

そんなオレは今、境内の自宅にて家族揃つて朝飯を食べている。軽く紹介すると、味噌汁をすすつてするのが父・直己なおき、沢庵をかじつたのが母・美代子みよこ、玉子焼きを頬張つたのが姉・凜花りんか、そして未だ納豆に舌鼓を打つてるのが問題の居候・ヴィアンだ。

スラリとした長身に、ウェーブのかかった灰色の長髪。そして丈の合わない浴衣（父のお古）を着た年齢不詳（見た目二十代後半くらい）の外国人、それがヴィアンという男だ。

どうしてそんな不得体の知れない男がウチに居候しているかをちゃんと説明するには、かなりの時間と労力を使うことになるので、ここで割愛して、こちらも軽く紹介させてもらうと、春休みに拾った“吸血鬼”がヴィアンだ。

まあ、念のため言つとくと、オレは電波さんでも、ファンキーな脳みその持ち主でもない。

至つて普通な男子学生……とも言い切れないのが悔しいが、それでも確かにオレは人間で、ヴィアンは吸血鬼　いや、吸血鬼“もどき”だ。

と、誰に言つてるかよく分からない語りはこの辺にして、朝飯を終えたオレは身支度を整え玄関へ向かつた。

そして、

「いつてらつしゃーい……」

寝ぼけ眼のヴィアンに見送られ、家を出た。

……あの野郎、また寝るつもりだな。

そんなことを思いながらも、境内から続く石段をやや早足で降りる。

何故か説明口調で長々と語つていたので、なかなかの時間になってしまった。

さすがに一年生初日の始業式から遅刻はマズい。

なので、途中からは一段飛ばしで、石段を駆け降りる。結構危険な技だが、ガキの頃からずっとやっている技なので、何一つ狂いなくオレは降りきった。

そしてそのタイミングで、

「おはよう、智流くん」

と、声を掛けられた。

ガキの頃からずっと知つていてる人物に。

同じ高校に通う幼なじみ・結城真実^{ゆうきまみ}に。

今回のお話の対戦相手・いやがるサキュバスに。

だけど、このときのオレはお約束通り、まだ何も知らない。

「おはよっ、智流くん」

「おはよ、結城。急がないと遅刻すんだぞ」

「それは智流くんもでしょ」

「つーか、珍しいな。お前がこんな時間に登校なんて」「まあね。今日はちょっと寝坊しちゃって……」

「ふーん。そりゃ珍しい」

品行方正・学業優先・優等生。

しつかり・きっちり・すつきり。

そんな言葉が、隣を歩く結城真実には、よく似合つ。

いつも通りの、しつかり校則を守った制服。

いつも通りの、きっちりまとまつた三つ編み。

いつも通りの、すつきり無駄のない黒縁眼鏡。

いつも通りの、ぴつきり色を添える桜の花の髪留め。

あれ？ 一個、多くね？

つーか、『ぴつきり』って何よ？

つーか、髪留めって何よ？

スクールバックにアクセサリーを付けることも、スカートの丈を短くすることも、もちろん髪を染めることも、それどころかオレが学校にゲーム機（携帯用じゃなくて家庭用の）を持っていくのも、NGだつた結城が『飾りの付いた』髪留めをしている。

え？ 何？ もしかしてアレ？

天変地異の前触れ？

確かに地球温暖化がひどいとか聞くもんなー。

今年は例年より桜が早く咲いたもんなー。

つーか、そうだよな。

春だもんな。新年度だもんな。
いくら真面目・生真面目・大真面目の結城だつて、少しは浮かれ
るもんな。

天変地異とかは言い過ぎだな。

と、チチ反省していると、

「ヴィアンさん、だつけ？」

思い出したように結城が言つた。

「ん？ 誰が？」

「今、智流くんチに泊まってる人」

「あー、そんな人もいたような気が……」

「そんな人つて、智流くんの恩人でしょ。貧血で倒れてるところを
助けてもらつたんでしょう」

「あー、そんなこともあつたなあ。懐かしいなあ」

。

“貧血”ね。

確かに、あのときのオレは血を失つてたな。

血が足りてなかつたな。

物は言いよう、とはこのことだ。

もちろん、そんな事件を知らない結城は、気にせず話を続ける。

「もー。懐かしいつて、ついこのあいだじゃない。しつかりしてよ
ね、今日から二年生なんだから」

「あー、来年はもう大学受験かよ。ついこのあいだ高校受験したつ
つーのに……」

「…………はあ。春休みは懐かしくて、去年はついこのあいだ、なのね。
智流くんのその時間感覚が私は心配になるわ」

そう言つて中指でこめかみを押さえる 困つたり悩んだときの
結城の癖。

これもガキの頃から見慣れた光景。

確か、中学校の頃から……。

「そういや、中学の卒業式のときもお前、寝坊してたな」「え？ そうだけ？ 忘れちゃったよ、そんな昔のこと」「おじおじ。それも去年のことだぞ。人のこと言えねえじゃねえかよ」

「いいの。今は智流くんの話をしてるんだから。ていうか、そんなことよく覚えてたね」

智流くんのに。

と、ボソッと呟く結城。

「ちょい待て。今、聞き捨てならねえセリフが聞こえたぞ」「え？ 幻聴じゃない？ 気のせいだよ。そういう風に思ってるから、そういう風に聞こえるんだよ」

「……まあ“思えば”聞こえるもんは認めるナビよ」「一か、認めざるをえないけど

“思えば”そう感じる。

“思うこと”で現実となる。

それは、ついこのあいだの春休みに実体験ありありのことだから。“で、よく覚えてたね、そんなこと。何か記憶に残るようなことあつたつけ？”

「ありありだ。その日に初めて、お前が津々高に入るつてオレは知つたんだから」

まさか小中学校に続き、高校まで一緒になるなんて思つてもみなかつたし。

「つーかさ、なんで津々高なんか入つたんだよ？ お前の成績なら隣町の進学校とか行けただろ」

津々浦第一高校は部活動関係は有名だが、お勉強の方はイマイチな学校だ。

さらにオレは帰宅部で、成績も中の中。

だけど結城は同じ帰宅部でも、成績は上の中。

中学校のときも勉強ができたヤツだ。

それが何故、オレと同じ高校に？

「……智流くんだけにホントのこと言つと、遠くの学校に行くの面倒だつたの。毎日バス通学とか疲れそつだし」

ウチのお母さんには内緒ね。

と、小さく舌を出す結城。

えらくカワイイじやねえかよ。

これが幼なじみじやなければ、軽く萌えてるところだつた。
つーか、世間は『幼なじみ』のイメージを聞違えてる。

ほとんど家族みたいなモンだから、フラグなんか立たねえつー

の。

そして、そんなノーフラグな結城が続けて言つ。

「だけどさ、まさか高校まできて別々のクラスになるなんてね。今まで全部同じクラスだつたから、逆に不意打ちつて感じ。神様つて案外ノリ悪いんだね」

「いやいや、ノリで運命決められても困るし」

「でも今日から新クラスだから、また一緒になれるかもね」

「ああ、そうだな ていうか、そうだとイイな」

そう言い切つた直後、結城の歩みが止まつた。

だけどオレがそれに気付いたのは、彼女から数メートル離れてからだつた。

「ん？ どうした？ 結城」

オレも立ち止まり、半身だけ彼女の方を振り向いた。

「い、いや、智流くんがあまりにも素直だつたから、世界の終わりがくるのかビックリして……」

「それは言い過ぎだ」

天変地異より言い過ぎだ。

「第一、オレきつかけでラグナロクなんか起きるわけねえし

そんなこと起きたら、カミサマ適当過ぎだし。

「いや、もし同じクラスになつたら、また宿題させてもうおうかと思つて」

オレがそう言つと、一拍置いてから、

「教科につき千円頂きます」

と、眼鏡の位置をクイッと直して言つた。

「そこに『幼なじみ割』適用で！」

「ダメです。『学割』との併用はできません」

「なんと！？　まさかの割引の落とし穴！」

「さらにクーポンも併用不可です」

「クーポンあつたの！？　つーか、よく考えりや学生以外は宿題な
くね？」

「『学割』適用で一教科千円。これ以上は譲一文まけられまへん」

「ちよい待て！　急に変な関西弁入れんな！　お前の優等生キャラ
崩れるから！」

などと戯れていたせいで、一年生初日の始業式のこの日、二人仲良く遅刻することになった。

「「めんなさい」

と、結城は謝った。

だけど凹んだのは謝られた方だった。

「おかいり」

「ん。ただいま」

立ち尽くす相手をそのままに、オレのところに帰ってきた結城。そして足並み揃えて、オレたちは体育館裏を後にした。

「つーかさ、告白が体育館裏つてベタ過ぎね？」

体育館から十分離れ、校門近くまで歩いてきたところで、オレはそう笑つた。

「ほり、笑わないの。あの人だつて真剣だつたんだよ」「まったくもう、どこめかみを押さえる結城。

「まあ確かに、目は真剣過ぎて怖いくらいだつたな」「まるで何かに取り憑かれているかのように」

「うーん……でも私、あの人と面識ないんだよね。学年だつて一つ上の先輩だし。なんで突然告白されたんだろう？」

今度はこめかみをトントンとリズミカルに叩きながら、疑問を口にした。

「アレじゃねえの？ 一田惚れつてヤツ」

「まっさかー。私みたいな地味キヤラに？」

「ないないない、と笑いながら結城は少し大袈裟に手を横に振る。
……地味キヤラつて自覚あつたんだ。

つーか、いまどきこれほどの優等生ルックスなヤツはいないから、逆に田立つけど。

まあ、変わらず着けている桜の髪留めは別として。

「でもさ、まさか本当にまた智流くんと同じクラスになるなんてね。朝言つてた通りになつたね」

「ああ、そのせいで遅刻しちまつたけどな」

「苦い顔をして、オレは言葉に少し嫌みを込める。

「それは私だつて同じだよ。せつかく無遅刻無欠席で来てたのに……築き上げてきた優等生キャラが台無しだよ」

……あ、そつちも自覚あつたんだ。

「つーか、結城も遅刻したのに、なんでオレだけ罰当番なわけ？」

「それは智流くんが遅刻常習犯だからでしょ。しかも担任の先生が魚住先生だし」

「あー、なんで一年に引き続き魚住さんなんだよ。オレ、あの人苦手なんだよなー」

「え？ そうなの？ 魚住先生、カツコイイしフレンドリーだから人気だよ？」

「いや、まあ、カツコイイのはイイんだけど、フレンドリー過ぎるのが苦手なんだよ」

「ふーん、そうなんだ」

そう納得してから、少し間を開けて、

「じゃあ、私もフレンドリー過ぎ？」

と、結城が訊いてきた。

「は？ 何それ？ オレたち幼なじみじゃん。フレンドリーフーかアミリーみたいなもんじやん」

「そつ……だよね。何それ、だよね。意味分かんない質問だよね。反省会もんだね。今の私はないわー」

「そつ……だよね。何それ、だよね。意味分かんない質問だよね。ちようどそのとき、オレたちは校門を過ぎた。

そして、そこでオレは立ち止まつた。

「あ、オレちょっと寄り道して帰るから、いつの道行くわ」

「え？ そうなの？ あつ、もしかして、またゲーセン？」

おばさんに言い付けちゃうぞー、と同じく立ち止まつた結城が意

地悪そうな笑みを浮かべる。

「そんなんじやねえって。これから人と会う約束してんだよ」

「へー、珍しい。約束は平氣で破る主義の智流くんが」

「……一体、お前はオレをどんなキャラに仕立てようとしてんだよ」

「んー、不良系オレ様キャラ？ だつて現に今、金髪でサングラスにピアスまでして、さらには全身ヒョウ柄の」

「してねえよ！ 小説じや分かんないけど、超普通の学ランを着た

超普通の高校生だよ！」

つーか、オレにヒョウ柄の何を着せようとしたんだよ。

……てか、流れで自分のこと超普通とか言つちやつたけど、もう完全に普通じやないんだよな、オレ。

ま、目の前にいる結城は何も知らないけど。

知らなくてイイし、知らない方がイイし。

「んじや、きちんと約束果たしてくるわ

「了解。あんまり遅くなっちゃダメだよ」

「ウチの親みたいなセリフだな、それ」

「そりゃそうだよ。私は智流くんのファミリーみたいな存在なんだから」

お母さんの言ひ方とは絶対なんだから、とオレに指差す結城。

……うわあ、ホントの母さんより厳しい。

ウチって基本、放任主義だから。

ま、補足説明だけど。

「んじや、また明日な」

「うん、また明日ね」

そうして、オレたちは校門前で別れた。

「つけて、オレは“原因”の一日を終えた。

承・追

翌日。一年生一日目。

お約束通りのフライングボディプレスでヴィアンを起こし、いつものように家族揃って朝飯を食つて、普段より少し早く家を出た。実はオレはやればテキる子なのだ。

一度寝（朝食後）と無駄な語りがなければ、遅刻なんてしないのだ。

別に、担任の魚住さん^{うおすみ}が怖いから早く出たわけじゃないのだ。別に、フライングボディプレスで脇腹を痛めて一度寝できないわけじゃないのだ。

.....。

案外あの技、危険だな。

姉ちゃん、あんな技とか（舞の海並みのバリエーション）を毎朝オレに繰り出して、よく怪我してねえな。

そんな風にガキの頃の思い出を、心と脇腹の痛みと共に感心しながら歩いていると、昨日別れた校門前によく見慣れた後ろ姿が見えた。

少し早足で彼女の隣に並び、

「おはよ、結城」

と、声を掛けると、

「あ、おはよう、智流くん」

いつも通りの声が返ってきた。

「ねえ、ちょっと聞いて。昨日あの後、ものすつじく大変だつたんだから」

と、女子特有の少し大袈裟な前振りをする結城。

その黒く艶やかな髪には、昨日と変わらず桜の髪留め。

「何故だか分からないけど、帰り道でさらに一人に突然告白された

んだよ。しかも、一人とも津々高生だけど、また私の面識ない人。これも智流くんの言つてた『一田惚れ』ってヤツなのかな？

「地味キャラなのに？」

「あ、その言葉ちょっと傷ついた。自分で言つ分にはイイけど」「あ。悪い、ゴメン、すまん、申し訳ない、かたじけない」「いやいや、最後のは謝つてないし」「で、どうしたんだ？ どっちかOKしたのか？」「いやいや、そんなよく知らない人の告白、受けれるわけないでしょ」いくら地味キャラでも。

と、結城は笑う。

「でも本当になんなんだろ？ 春だから、みんな浮かれてるのかな？」

「あー、確かに。地球温暖化がひどいって聞くもんなー」「え！？ そんな地球全体の問題なの！？」

などと、他愛もない話をしながら校舎に入り、靴箱に向かつたところで、オレは言葉を失った。絶句した。

それほどビックリした。つーか、正直引いた。

当人の結城は、スクールバッグを落としてフリーズしていた。小さなその空間に溢れかえるほど　いや、実際に溢れているほど、結城の靴箱には手紙が詰め込まれていた。

朝の学校・靴箱・手紙。

中身は見ていない。だけど、そのフレーズから連想できるのは、どう考へてもアレしかなかつた。

マンガとかで、たまに見るような光景。実際に見ると、正直、気味が悪かつた。

そしてオレはこのときよつやく、何かがおかしい、と思つた。

承・更

放課後。夕暮れ。屋外プール横。

「あー、腰痛え」

上半身を大きく後ろに反らしてストレッチをしてみると、

「おつかれ、智流くん」

オレの目からは天地逆になつた結城が声を掛けってきた。

「草むしり、終わったの？」

素早く上半身を戻して振り返ると、続けてそう訊いてきた。

「おう、完璧。魚住さんもこれなら文句ねえだろ」

オレは辺りを見渡す。

キレイな地面と、三つの「ミ袋。

数時間前まで草が生い茂っていたとはとても思えない。

「つか、結城、なんでまだ学校いんだよ？もつすぐ夜になるぞ」

「あ、いや、あの手紙の全員にお断りってきて、気付いたらこんな時間に……」

「え？ マジで？ 全員に会つてきたの？」

全五十三人（手紙を教室に持つていって一人で数えた）に？

「うん。相手が想いを伝えてくれたんだから、私もちゃんとそれに応えないとと思って」

「しつかりしてるな、お前は。でも、そのしつかりついでにせつさ

と帰れ、暗くなる前に。オレも魚住さんに報告したら帰るか」

「あはは、今日は私が注意されちゃつた。それじゃあ、お父さんの

言つ通り、急いで帰りますか」

「誰がお父さんだよ」

せめてお兄ちゃんにじとけよ。

いや、ただの幼なじみだけど。

「じゃあ、また明日」

「おー、また明日」

そうして今日は、結城と別れた。

いや、別れたはずだった。

「お、チルチルくん。今、帰りかい？」

完全に日が落ちれば、闇に溶け込んでしまってそうな服装の男つまりヴィアンに会ったのは、ちょうど校門を出たときだった。「なんでお前がこんなとこにいるんだよ？ つーか、そのあだ名やめろ」

そのまま足を止めず、帰り道を歩き続けるオレ。

ヴィアンもそのペースに合わせて隣を歩く。

「えー、君にぴったりだと思うんだけどなあ」

さとる、智流、チル、チルチル。

最初は単なる読み違いのあだ名、だつたんだけど。

「で、僕がここにいる理由は、急遽おつかいを頼まれたから」と、手に持ったエコバック（確かにウチの）をオレに見せるヴィアン。

「本当に美代子さんはドジつ娘だよね。カレーを作るのにカレールーを買い忘れるなんて」

「人の母親を下の名前で呼ぶな。人の母親をドジつ娘って言うな。次言つたら殺すぞ」

「物騒なこと言うねえ、最近の若い子は。だけど“殺せる”ものなら是非ともお願ひしたいねえ」

と、ヴィアンはニヤニヤと笑う。

……うわあ、本気で殺してえ。

その方法は思いつかないし、あるかどうかも分からぬけど。

「で、君はこんな遅くまでどりしたんだい？ 学校から出てきたから、また病院に寄ってきたわけじやなさそだじ」「ああ、ちょっと覗当番をな」

「なるほど。だから僕は登校前に散々言つたんだよ、そんな全身クロヒョウ柄の」

「着てねえよ！ 超普通の学ラン着てるだろ？ が！ お前の目は何を映してんだよ！？」

「つーか、クロヒョウ柄つて黒一色じゃねえか。
学ラン＝黒。あながち間違いでもないけど。

「まあ、それはさておき。この辺り、何かイイ匂いがするねえ」「あからさまな話題転換で、鼻から空気を吸い込み、ヴィアンは目を細める。しかし、

「は？ しねえよ、そんな匂い。バッグの中のカレーの匂いじゃねえの？ もしくはお前が腹ペコなだけか

オレは否定する。一応香つてみたが、空気は無味無臭だ。

「まあ、僕が腹ペコなのは認めるけど、カレーみたいなスパイシーな匂いじゃないよ。もっと甘くて魅惑的に匂いがするんだよ」

「なるほど。目だけじゃなくて鼻までイカれてるんだな、お前は」「うわ。相変わらずのS発言だね。そんなサディスクティックな性格だから、ここまでたつても彼女が出来ないんだよ」

「つるせえよ。つーか、ついこのあいだ会つたばかりのヤツにそんなこと言われたくねえよ」

「ほら、そういう言葉遣いもいけないんだよ。むらさき君は『すすきはらさとる』でイニシャルまでSなんだから、どうぞこれからXSなんだよ」

「お前、それは身長の話か！？ オレのサイズがXSだつて言つてるのか！？ 違うぞ、オレはMだ！」

確かに、長身のお前から見たら小さいだろ？ けど…

確かに、クラスでも背の高い方ではないけど…

「いやいや、僕はそんなこと言つてないよ。自意識過剰つてヤツだよ。そういう風に思つてるから、そういう風に聞こえるんだよ。それこそつっこみのあいだ、経験したばかりだろう？」

それから、と周囲を一瞥してからヴィアンは言葉を続ける。

「今の最後のセリフは、大声で言つもんじゃないよ。誰か知らない人が聞いたら、完全に変態の発言だよ」

オレはMだ、つて。

「はっ！」

オレは慌てて周囲を見渡す。

ほとんど日が落ちて暗くなっているが、辺りに人影はない。

……良かつた。

ここはもうウチの近くだ。

変な噂をされても困る。白い目で見られても困る。

彼女が出来るどころか、『近所さん』がいなくなる。

まあ、家族に聞かれるくらいなら、変な誤解をされる」ともない

だろうけど。

あと、ファミリーみたいな存在の結城も。

……あ、そうだ。

結城のこと、ヴィアンに訊こいつと思つてたんだ。

結城の“異常”のことを。

「あのせ、ヴィアン」

と、口を開いた直後だった。

宵の口の闇を切り裂くような、悲鳴が聞こえたのは、よく聞き慣れた声の、よく聞き慣れない声。

それは確かに、結城真実の声だった。

* 転 *

「サキュバス」

開口一番、ヴィアンはさつした。

そして続けて、

「何度も言つようだけど、僕は専門家じゃないから正確な情報じゃないかもしねないけど、それは承知としてね」

と、例によつて例の如くオレかあるには他の誰かに言い聞かすよう

うに、言つた。

「そんなこと分かつてるから、さあと本題に入れ」

「はいはい。本当に君はせつかちなんだね。でも、あんまり早い男

の子は女の子に嫌われちゃうよ？」

「つるせえ、黙れ。意味分かんねえ」と言つた

「あれ？ 分からなかつた？ そんな君は是非とも『お父さんやお母さんに訊いてみよう!』」

「やめろ！ 親子関係ギクシャクするわ！ ホントにやる子がいたらどうすんだ！」

「ん？ 『ホントにやる子』って誰のことだい？」

「つるせえ、黙れ、殺すぞ」

「“殺せる”ものなら是非

と、ニシコリと笑うヴィアン。

「.....」

それに対し、オレはあからさまに不機嫌な表情で黙る。

じついう場合は、じついう態度が効果的。

ついつのあいだ出合つたばかりでも、そのへりこもつ知つてい
る。

だからヴィアンは、やれやれ、といった感じで肩をすくめると話

を続けた。

「サキュバス。言い換えると夢魔や淫魔。^{むま}^{いんま} その名の通り、夢あるいは現実世界に相手の理想の女性像で現れ、その姿で魅了し、最後には淫らな行為で男性の精を絞り尽くす悪魔^{ゆづき}」

「……その『サキュバス』に結城^{ゆづき}が取り憑かれてるっていうのか？」
「いやいやいや、こっちも何度も言うようだけど『取り憑かれてる』なんて人聞きの悪い言葉、使わないでほしいよ。『僕ら』はそういうことはしないいや、できない。“僕ら”はそういう存在だからね。だから今回も、彼女がそう在りたいと願つたから、そうなつたんだよ。つまりニユアンスとしては『取り憑かれてる』より『宿している』の方が近い言葉だね」

「はー……まあ、どうでもいいや」

“僕ら”的存在意義に関わることだからどうでもよくないよ、と訂正するヴィアンを無視して、オレは話の核心を切り出す。「で、結城を助ける方法はあるのか？」

すると少し間を開けてから、

「それは、サキュバスを取り除く方法、と考えていいのかい？」
と、ヴィアンが答える。

「当たり前だ。それ以外ないだろ」

「そうかい？ 今まで僕が出会ったサキュバス“もどき”は誰もが皆、人生を謳歌していたよ？ だってモテモテ人生だよ？ 相手を利用すれば、金も権力も名誉さえも思いのままだよ？」

「そんなこと知らねえよ。それこそ、どうでもいい。オレは今、結城を助けたいんだ」

あいつの悲鳴なんか、一度と聞きたくねえんだ。

「ふうん、君は相変わらずの利己主義者だねえ^{ヒジイズム}」
と、ニヤニヤとヴィアンは笑う。

「……悪いかよ？」

「いいや。人はそう在るべきだと、僕は思ってるよ。
と、今度はニッコリとヴィアンは笑う。

「だからこそ、彼女は望んだんだ。願ったんだ。サキュバスを、求めたんだ。そして、宿したんだ」

「…………？」

「サキュバス、の説明は分かつた、けど、
「だけど、理想の女性像で現れる、つてのは叶つてねえじゃないか。
実現してねえじやないか。見た目は普通に結城だつたぞ」
「お、君もなかなか分かつてきたね。その通りだよ。結局のところ
『サキュバス』なんて悪魔、存在しないんだよ。いるはずなんて、
ないんだよ」

だからサキュバス“もどき”なのぞ。

「なのに彼女は求めた。だから中途半端に叶つた。姿形は変わらな
いけど、フェロモンの異常分泌ぐらいは実現した　ただし、相手
は無差別に」

「だから突然告白されたり、さつきみたいに男に襲われそうになつ
たのか……」

「その通り。さつきの暴漢くんも多分フェロモンに　サキュバス
の“魅了”に当たられたんだろう。暴漢くんはおそらく今『じろ、自
分が何をしていたのかなんて忘れている頃だろ』よ」

言わば彼は加害者じやなくて、被害者だつたんだよ。

「で、具体的に何をすれば結城を元に戻せる?」

「うーん、そこが問題なんだよなあ」

「なんだ？　何が問題だ？」

「普通はね、もつとサキュバスの力が表面化している　いや、さ
せてるんだよ。何せ、モテモテ人生だからねえ
羨ましい限りだよ、と無駄な感想を一度挟んで、

「それで本来なら僕が『ガブリ』とするだけで終わるんだけど、彼
女はそうじやない。彼女自身がそれを拒んで、封じ込めている。ま、
完璧には出来てないから、力が漏れてるけどね」

サキュバス“もどき”的“もどき”だね、とヴィアンは笑う。

「望んだくせに、拒んでる。一体、何がしたいんだか僕には分から

ないよ。チルチルくんの話を聞く限り、まったくもってんでせつぱり皆田見当も付かないほど全然到底、僕には分からぬよ

「？ 分かんねえくせに偉そうだな」

「……はあー。わざわざ嫌みで言ひてるのも、君には分からぬか

……」

やれやれ、とまた肩をすくめるヴィアン。

「？ よく分かんねえけどオレのこと、バカにしてんのか？」

「バカに、というより呆れてるんだよ。君はもつと人の心を理解すべきだ、って」

「そんなもん簡単に理解できたら苦労しねえよ」

「君の『能力』なら出来るじゃないか。というか、早速その『能力』

をまた使つてもらうよ」

「……結城の『夢』に入り込むのか？」

「その通り。さすがに一度田となると、察しがいいね」

「……はあ。またあの『能力』を使つことになるとはな……」

やつぱり超普通の人間には戻れないんだろうな　いや、元々普通じやないのか、オレは。

「だけど、ようやく三戦田にして『夢魔』とはツキが向いてきたね。『夢』は君の得意分野だもんね。さあさあ、早くサキュバス退治に行こうじゃないか」

「？ このあいだと違つてずいぶんノリノリだな」

「そりやそうだよ。サキュバスは低レベルの割に美味しいんだ。特に若い女の子は格別に美味しい」

と、ニヤニヤと笑うヴィアン。

「……その表情で今の最後のセリフは、かなりエロいぞ、お前」

多分、ウチの家族が見ても引くわ。

「ああ、失礼。久々の食事なんで嬉しくてたまらなくてね」

そして、白い歯を見せて笑いながら、

「何せ、僕は腹ペコなんだ」

と、続けた。

鋭く長い八重歯を

吸血鬼“もどき”の牙を見せて笑いながら。

* 結 *

半月が輝く頃。夢守神社境内。あめまつじ実家の客間。

「本当によくこんなもので出来るよね」

作業を進めながら、感心するように、ヴィアンは言った。

「まあな。相手が眠つてると、『舞台』が整つてる条件さえクリアできればあとは簡単だ」

オレも作業の手を止めず、そつ答える。

「…………」

穏やかな顔で、オレたちの作業のちょうど中間で、結城は布団の中で眠っている。

そんな結城を横目に、オレたちは境内で拾つてきた玉砂利を並べていた。布団からおよそ人一人分くらい離して、布団を囲うように四角く等間隔に。

そんな作業を、眠る少女のそばで、男一人が黙々と行つている。

「…………」

端から見ればかなり異様（シユール？）な光景だが、そのことにオレが気付くのはしばらく後の話になる。

「…………」

「ところで、人払いは大丈夫かい？」

この光景に気付いているかどうかは分からないが、ヴィアンがそう訊いてきた。

「ああ。父さんと母さんはテレビに夢中だし、厄介な姉ちゃんも風呂に入った」

オレの部屋に声掛けもなしに入つてくるような予測不能な姉ちゃんだが、彼女が長風呂なのをオレは知つている。

ふつ、姉ちゃん敗れたり。

いや、戦つてるわけじゃねえけど。

ちなみに、結城に襲い掛かった男を撃退したのも姉ちゃんだ。

「ちつ。生け捕りにしようと手加減するんじゃなかつた。おかげであの野郎を逃がしちまつた」

と、気を失つた結城を抱えながら恨めしそうに吐き捨てていた。
……生きたまま以外に捕まえる選択、あつたんだ。

我が家ながら、相変わらず怖え。

と、ガキの頃の恐怖体験を思い出しかけたといひで、オレたちは全ての玉砂利を並び終えた。

「よし、これで『舞台』は完成だ」

玉砂利で囲つた領域、空間。それを『舞台』と見立てることがオレの術式。

そして、後はそこに入るだけ。

「完成、はイイけど、君は着替えなくてイイのかい？ 学ランじや動きにくくないのかい？」

「ん？ まあイイよ、別に。それに着替えてる間に結城が目を覚ましたら意味ねえし」

結局、気絶した結城をウチまで運び（基本姉ちゃんが。オレたちは付き添つてただけ）、客間に寝かせ（母さんと姉ちゃんが。オレたちは布団出しただけ）、結城んちに電話を入れ（母さんが。オレたちは見てただけ）、さつさと晩飯（肉じゃがに変更になった）を食べ、オレの部屋で作戦会議をして、着替える間もなく今に至つている。

「つーか、お前もそのカツコでイイのかよ？ そんな動きにくそうなカツコで」

ヴィアンもオレと同様に、着替える時間はなかつた。

室内なのでコートは脱いでいるが、黒のシャツ・ベスト・ズボンというカツコ。しかも、無駄にレースやらベルトが付いているモノ。「ああ、それなら大丈夫。何度も言つように僕は戦闘能力皆無だから、戦闘には参加しないよ。いつも通り、いざというときの“サポート”に専念するよ」

と、一ヶ『リ笑うヴィアン。

「あつや。まあ、期待はしてなかつたけどよ」

「うん、それが正しよ。僕も所詮、ヴァンパイア“もどき”だか

らね

。

それならオレは、人間“もどき”なんだろつか？

こんな術式を使えるオレは、間違いなく普通の人間じゃないんだ
わう。

ま、今はそんなことどうでもいいや。

こんな『能力』で結城を助けられるなら、そんなことはホントに
どうでもいい。

それならオレは、人間“もどき”でいい。

それならオレは、人間“もどき”がいい。

「んじや、行くぞ

「はいはー。いつでもどうぞ」

「

オレは田をつぶつ、一度心を落ち着かせてから、

「『夢神楽』^{むめいがく}」

そう唱えて『舞台』の中に踏み込んだ。
結城の『夢』へと、オレたちは入り込んだ。

結・続

そこはウチの、夢守神社の境内ゆめもりじんじゃだつた。

ただし、空には太陽が高く登り、そして神木がまだ立派にそびえていた。

「これは……オレが小学生くらいの景色だ」

中学に入つてすぐ、神木は雷で焼けている。

だからこれは、それ以前の光景だ。

「ふうん。これが彼女の『夢』……『想い』がある風景か」

やつぱりね、と隣に立つヴィアンは呟いた。

「まあ、ガキの頃は結城ゆうきもずっとここで遊んでたからな」

「……本当に君は、なーんにも分かつてないんだねえ」

ホントやれやれだよ、とまた肩をすくめるヴィアン。

「なんだ、また呆れてるのか？」

「いや、今回は少しバカにしてる。だけど、そんな君でも僕の言つてることをすぐに、まさに身をもつて、知ることになるよ」

そう言い切ると、まっすぐと前を見た。

オレも、バカにされたことにムカついたが、その方向を見据えた。広い境内の真ん中に『彼女』は立っていた。

いつも通りの、しつかり校則を守つた制服。

いつも通りの、きつちりまとまつた三つ編み。

いつも通りの、すつきり無駄のない黒縁眼鏡。

そして昨日からの、桜の花の髪留め。

「……結城？」

「へえ。君には、そう見えてるのか」

「……人のセリフ、パクるなよ」

「ああ、失礼。僕には『金髪グラマラス美人』に見えてるものだから、ついね」

「は？ 黒髪黒眼鏡のいつも通りの結城じゃ」

「私のこと、無視しないでくれる？」

結城がそう言つや否や、黒い『何か』をこちらに飛ばしてきた。瞬時にオレはそれに反応し、横にかわす。

しかしヴィアンはその場から動くことなく、

「うぐっ！」

『何か』に胸を突き刺され、貫かれた。

「あれ？ お一人様、もうおしまい？ あはははは、つまんないの

ー

そう笑う結城の後頭部から『何か』は生えていた。

黒く艶やかな髪の三つ編み。

それが人間の髪とは思えないほど瞬時に伸び、ありえない鋭利さでヴィアンを貫いていた。

「あははは、弱すぎー。一体こんなとこに何しに

ー

「なんちゃって」

貫かれたままのヴィアンがそう笑うと、代わりに結城の笑顔が消え、その凶器を伸ばしたときと同じ速さで引き戻した。

そして音もなく、血もなく、ヴィアンの身体は“元に戻った”。

「な、なんで死んでないの、アンタ！？」

黒縁眼鏡の奥の瞳を丸くして、結城は訊いた。

「こんな程度じゃ僕は死なない いや、死ねない。僕はヴァンパイア“もどき” いや、こちらの世界では“ほぼ”ヴァンパイアだから。その最たる特性の『復元』は回復や治癒なんてレベルじゃないから、そんな攻撃じゃあ傷一つどころか、血一滴すら流せないと、ヴィアンが質問に答えると、あははは、とかつきまでと同じく結城は笑い出した。

「なんだ、同族じゃないの。だつたら分かるでしょ？ 私の邪魔をしないで」

「そんな怖い目で睨まなくても、君の邪魔をする気はないよ、僕は」
そう言うと、ヴィアンは数歩離れたところにいるオレを見た。
それにつられて、結城もこちらを見た。

だけどそんなことは気にせず、オレはズボンのポケットから『武器』を取り出した。

サイズは、開いたケータイと同じくらい。

楕円の円柱のようなフォルム。

年季の入った朱塗りのカラーリング。

ちょうど真ん中には一本の切れ目が入っている。

「あはっ、何それ？ 短刀？ 小太刀？ それにしても短すぎない？」

そんなんじゃ私まで届きませんよー、と不愉快な声で笑い続ける結城。

……いや、結城はそんな顔で、そんな笑い方はしない。

こいつは、サキュバスだ。

「『無太刀・言乃刃』」

そう唱えて、オレは刀を抜く。

すると、一瞬だけ警戒の表情を見せた後、

「あはははは、やめて、お腹痛いってば。何それ？ 短刀でも小太刀でもないじやん。肝心の『刀身』がないじやん」

ないないない、と一層不愉快にサキュバスは笑う。

……確かに、そうだ。

オレが両手に持っているのは、鞘と柄だけだ。

『無太刀』は、そういう刀だ。

だけど刀身は 『言乃刃』は、今はまだ、あいつに見えていいだけだ。

「へえ。お前には、そう見えるのか」

そう“宣言”してから、オレは右手の柄を大きく横に振る。

すると、長く直線的な刀身が、鞘のサイズに合わない刃が、現れた
いや、そういう風にサキュバスにも今、見えているはずだ。
「ど、どこからそんな刀身が出てきたの！？」

狙い通り、サキュバスはそう驚いた。

よし、“宣言”は有効化してる。

そう確信すると、オレはサキュバスに向かつて駆けた。
一気に斬り込みに向かつた。しかし、

「あはっ、遅いわよ！…」

鞭のようにしなやかに、槍のように鋭い黒い三つ編みが、オレに向かつて飛ぶように伸びていた。

とつさにそれを『言乃刃』で上へと弾く。

しかし、それはまるで意思を持つているように再度、上からオレを貫こうとした。

紙一重で一撃目をかわすと、オレは大きく何度も後ろへ跳んで距離を取った。

サキュバスもそれを見て、一度その凶器を素早く引き戻した。

『言乃刃』を構え直す。剣術を習つたことがないので我流だが、それでも自分に一番合つたスタイルで、

「ねえ、この髪留め、気付いた？」

唐突に、サキュバスはそう訊いてきた。

だけど、その表情も声も結城のものだつた。

「……毎日のようになつてんだ、気付かないわけねえだろ」

「ふうん……じゃあ中学校の卒業式の日のこと、覚えてる？」

「……お前がオレと同じ高校に」

「違うわよ！…」

結城がそう叫ぶと、再び黒い髪の槍が飛んできた。

それを今度は『言乃刃』で右に受け流すと、そのままオレは再び結城に向かつて駆けた。

「あの日は私が初めて髪を下ろしてみた日！ 三つ編みは子供っぽいかなって思ったの！」

背後から、受け流した槍が迫る。

振り返つてはいない。気配で感じじる。

だからその気配が最大になつた瞬間、その場で円を描くよう回転し、背中で仰け反るようにかわす。そしてその勢いを殺さず、オレは駆け続けた。

一方、結城は自分に向かつてきた槍を大きく舌打ちしてから一度引き戻し、

「小学校高学年のとき、恥ずかしいからって智流くんは私のこと苗字で呼ぶよつになつた！」

叫びながら、再度オレに放つた。

速いつ！

まっすぐと今までの比でなく速く、オレの心臓を両掛け飛んでくる黒い槍。

弾く、受け流す、そして駆ける。

一瞬にしてその全ての選択肢を捨てた。

立ち止まり、『薙乃刃』の腹で受け止めるふとを選択した。

ガキン、と金属同士がぶつかるような音を響かせ、オレを数メートル押し戻して、槍はようやく止まった。

力が、抜けない。完全に拮抗している。

鋭い槍の切つ先の一点だけに、神経を集中させる。

「高校に入って、初めて別のクラスになつて、授業中に智流くんの寝顔が見られなくて寂しかつた。こつそり起こしてあげられなくて悲しかつた」

少しずつ少しずつ、槍に込められた力が増していく。それと共に、オレの身体は押されていく。

「だからね、気付いたの」

力を加えてるようにはまるで感じさせない平然とした口調と表情で、結城は続ける。

「ああ、私は、もうこんなにも、智流くんのことが 好きなんだ
つて」

その瞬間、力のバランスは完全に崩れた。
しかし、オレは後ろに倒れることはなかつた。

むしろ、逆。

オレの身体は前に倒れていた。

槍に込められた力が抜かれ、それはただの三つ編みの髪に戻つて
いた。

だが、この程度なら予想範囲内だ。瞬時に対応できる はずだ
つた。

混乱してさえいなければ。

結城は、オレのことが、好きだつて？

だつて結城は、ただの幼なじみで、家族みたいな存在で、いつも
オレを助けてくれるヤツで。

なのに？

だから？

なんで？

ホントに？

あはは、本当に。

「男は皆、バカばっかり」

そう言つて、サキユバスが笑つた。

刹那、田の前の三つ編みがバラバラにほだけ、なんとか踏み止ま
つたオレの上半身を縛り上げた。

「つー

反応したときにはすでに遅かった。

腕も、首も、腹の辺りまで縛られ、そのありえない力で動けなくなっていた。

なんとか右手だけでも！

『言乃刃』を持つ右手に力を込める。

せめて『言乃刃』が使えれば、この髪を切れる。

しかしその瞬間、

「あはっ、させるわけないじゃん」

右の手首を強く締め上げられた。

「 つ！」

痛みのあまり、柄が手からこぼれた。

唯一の武器を、失った。

それを嬉しそうな目で見ると、サキュバスは後頭部の髪を自在に操り、新しい三つ編みを編み上げて、一本目の槍を作り出しながら、

「ねえ、智流くん、大好きだから」

結城の顔と声で、

「ここで死んで！！」

サキュバスは、笑った。

結・追

結論から言えば、一本目の槍がオレを貫くことはなかつた。届くことすらなかつた。

そしてさらに、オレは髪の束縛からも解放されていた。

理由は簡単。

槍も束縛も、『言乃刃』で斬り裂いたからだ。

もちろん、オレを助けたのはヴィアン ではない。

あいつはさつきから一步も動くことなく、それどころかポケットに両手を入れて、ただこちらを見ているだけだ。

戦闘能力皆無の戦闘不参加。

あの吸血鬼の『能力』には、攻撃力がない。優れているのは、異

常なまでの防御力だ。

だから、オレを助けたのはヴィアンではない。

ならば、一体誰が？

答えは簡単。

唯一の武器『言乃刃』を落とした身動きできないオレを、唯一の武器『言乃刃』を持つた自由に動ける『オレ自身』が助けた。

まあ、念のため言つとくと、オレは電波さんでも、ファンキーな脳みその持ち主でもない。

それはキャラ的に『オレ自身』の方だ。

正確には『ボク』。

春休みにオレを殺そうとした張本人。

オレと全く同じ姿をした、もう一人のオレ。

オレの影 オレの自己像幻視。

そいつが文字通りオレの影から現れ、落ちゆく『言乃刃』を掴み、勢いよく足元から飛び出して、槍も束縛も斬り裂いた。

「お、『ミチル』くん、久しぶり

ようやく片手をポケットから出して、ヒラヒラと手を振るヴィニア

ン。

「久しぶり、じゃないじゃないですか、ヴィアンさん。つっこみのあ
いだボクと会つたばかりじゃないですか」

と、言いながらもオレの隣に立ち、大きく手を振り返すミチル。
「相変わらずミチルくんは元気が良くて素直だねえ。チルチルくん
にも少しば見習つてほしいもんだよ」

「うるせえ、黙れ、殺すぞ」

「殺せる、ものなら是非」

と、ニッコリ笑うヴィアン。

「チルチル。それはヴィアンさんに失礼だよ」

そう言つて隣のミチルはオレをたしなめる。そして続けて、

「降り注ぐ日光の下で、とりあえず銀の銃弾で手足を撃ち抜いてか
ら、さらに十字架を見せて動けなくして、そこに聖水で二ソニクを
胃に流し込ませて、最後に白木の杭で心臓を突き刺すぞ、って言わ
なきや」

満面の笑みで言った。

「……相変わらずミチルくんは残忍殘虐だねえ」

と、ヴィアンは笑っていた ような気がする。

「……なんなのよ、そいつ？」

とても低い声と突き刺すような視線で、完全に除け者にされたい
たサキュバスがミチルを睨みつけていた。

「ボク？ ボクはチルチルの影 チルチルのドッペルゲンガー」

「お前の言うところの、同族、つてヤツだ」

そうやって、オレとミチルは一人で一つの質問に答えた。

「……あはは、なんだ、あんたもこっち側の存在なんじゃない。
それなのに、そのくせに、私の邪魔をする気なんだ」

「まあねー。ボクはチルチルの影だから、本体に従うしかないんだ

よう」

ボクだつてホントは嫌々なんだよう、ヒミチルは絶対オレがしないような表情を見せる。

「あはははは、じゃあそれなら、もつ手加減してあーげない
サキュバスがそう笑うと、その後頭部から無数の黒い髪の槍が伸びた。

そして次の瞬間、それが彼女の周りを高速で回転し始めると、あつという間に黒いドームとなり、その身体を包み隠した。

「あはは、これが私の絶対防御。そしてこれがこの状態での 絶対攻撃！！」

途端、ドームからいくつもの槍が飛び出し、オレたちは槍の雨に包まれた。

「あはっ、あはは、あははは、あはははは」

黒いドームの中から、笑い声が響く。

槍を伸ばしては戻し伸ばしては戻し、雨を降らせ続けながら。

「死んじやえ。私の魅力に気付けないヤツなんか、穴だらけのボロ雑巾みたいになつて死んじやえばイイ。美しい私の前に、醜い姿で跪けばイイ」

そう言つて笑いながら、雨を降らせ続ける。

「ねえ、まだ生きてる？ ギブアップしてもイイよ。私みたいに美しくて魅力的な女性は見たことない、つて言つたら許してあげてもイイよ」

そんなことを言つながらも、雨は止まない。

「限界なら限界って言つてイイよ。あはっ、無理か。もうとつくて死んじやつてるもんね」

「……ああ、限界だ」

オレがそう唸るように呟くと、突然雨が止んだ。

そして全ての槍がドームに引き戻された。

約束を守つた、わけじやないだろ？。

おそれらぐ、自ら降らせた雨で見えなくなっていたオレたちの姿を、確認するためだ。

「もうとっくに死んでると思っていた、オレたちを。

「な、なんで？ なんでも生きてるの？ なんで傷一つ付いてないのよ！？」

黒いドームから、叫びにも似たそんな声が響いた。

「よく見ろよ。一発かすったから、制服破けちまつてんだろ」

オレの言う通り、袖が少し破けてる。

「ウソでしょ！？ あれを全部かわしたっていいけど。ま、服ならあっち側に帰つても影響ないから、どうでもいいけど。

相変わらずドームから、ヒステリックな声が響く。

「ああ、かわした。オレ一人なら無理だけど

「ボクたち一人なら、なんの問題はない」

そう言つてオレは鼻で笑い、ミチルはニヤリと笑つた。

「だけど攻撃されっぱなしとか、オレの性格的に無理。もひ、限界」

「それに、今まで経つても埒が明かないしね。だから一気にカタをつけさせてもらひよ」

そう言い切ると、オレたちは駆け出した。

ただしドームじゃなくて、ヴィアンに向かつて。

「何か知らないけど、させてあげない！！」

再び槍の雨が迫る。

しかしそれを一警する事もなく、オレは駆ける。
見る必要は、ない。

全てミチルがなぎ払うから。

そのためにさつきの雨の中で『言乃刃』を渡しておいたから。オレの『オレ自身』に対する絶対的な自信があるから。

「ヴィアン、血をよこせ」

ヴィアンの前に立つと、オレはそう言つた。しかしヴィアンは、何度も言つようだけど、あんまり短期間で連續は君の体に悪影響だよ

お決まりのように渋つた。

「分かつてゐる。だから今回は少しだけでいい。それと……ちょっと

耳貸せ」

オレのその言葉を聞くと、ヴィアンは少しだけ屈んだ。ホント、少しだけ。

身長差があるので、そつするしかないのだ。

念のため言つておくが、オレが小さいのではない。ヴィアンが大きいのだ。

……あくまでも、念のため。

「えー、それはダメだよ。約束を破ることになるよ」

オレの耳打ちを聞き終えると、ヴィアンはそつ言つた。

「知らねえよ、お前が勝手にした約束なんか。それにオレ、約束は平氣で破る主義、だから」

そして続けて、

「それにお前、腹ペコ、なんだろ?」「
と、オレは悪い笑みを浮かべた。

「ねえ、まだ? そろそろボク一人で相手するのキツいんだけど!..」

ミチルがそう急かした。オレたち三人に向かつて飛んでくる槍を全て捌きながら。

「……まったくチルチルくんは性格が悪い上に、ヴァンパイア遣いが荒い」

ホントやれやれだよ、と一度肩をすくめるヴィアン。

そしてオレの両肩を後ろから固定してから、ガブリと首筋に咬みついた。

「 っ！」

鋭い痛みが体を走る。

だけど三度目ともなると、少し慣れてきた。

「はい、終了」

吸血鬼の牙を引き抜くと、ヴィアンはそつ言つた。

オレは咬まれたところをさすつてみる。

傷痕は、もうすでに、ない。

準備は、完了だ。

「ミチル、行くぞ」

「りょーかい」

言うや否や、ミチルから『言乃刃』を受け取り、オレは駆け出した。

さつきまでとは比べものにならないほど速く。

速く、疾く、迅く。

前に身を屈み、ヒヨウの如く。

「来ないでよ！…」

途端、黒い槍の集中豪雨がオレに降り注ぐ。

だが、オレは立ち止まらない。むしろ、さらに加速する。

頬や、腕や、脚に、槍がかすめる。

だが、そんなことを気にせずオレは駆け続ける。

確かに痛いもんは痛い。だけど、その痛みを感じたときにはもう、

そんな傷は『治癒』している。

だつて今のオレの身体には“ほほ”吸血鬼の血が流れているから。だから致命傷になりそうな槍だけ、最小限の動きでかわし、『言乃刃』で払い、一気に距離を詰めていく。

そして、

「まずは防御を崩させてもらうよ！」

黒いドームに一閃を見舞う。

瞬間、ドームは大きく裂け、その中のサキュバスが見えた。

サキュバスは 笑っていた。

「あはっ、そう来ると思ったあ

そう言つたときにはすでに、槍が身体を貫いていた。

裂けるほど吊り上がったサキュバスの口角のすぐ横から伸びた一本の槍が、正確に心臓を貫いていた。

「あはははは、残念でし

「なんちゃつて」

串刺しになつたままの『ボク』が、そう笑つた。

直後、オレはミチルの背後から飛び出し、ミチルの背を飛び越した。

「終わりだ！！」

動転した表情を見せるサキュバスに『言乃刃』を振りかざす。しかし、

「私はまだ終わらない！！」

瞬時にその目に殺氣を宿し、もう一本の槍を、ミチルを貫く槍の反対側から突き伸ばした。

大きな金属音と衝撃。

その一撃を『言乃刃』で弾いたオレは、その反動で遠く吹き飛ばされていた。

「あはっ、あんたなんかに私のこの絶対防衛は破れない」

そう言いながらドームの裂けた部分が、あつという間に再生していく。

サキュバスのその姿が、あつという間に隠されていく。
だから親切なオレはそれが閉じきる前に、

「なんちゃつて」

そう教えてあげた。

途端、ミチルの身体が黒い水のように崩れ落ち、本来のオレの影に戻つた。

そしてミチルの身体によつて隠されていた光景を、サキュバスも見たんだろう。

まだ開いている絶対防衛のわずかな穴から。

その驚きの瞳で。

ミチルを貫いていた槍の切つ先に咬みついているヴィアンを。

突き立てたその牙から、自分自身の存在を吸われている光景を。次の瞬間、黒く艶やかな髪は急速に牙から侵食され、瞬く間に白く染め上げられていった。

そして、力なく、音もなく、色もなく、絶対防御は崩れ去った。髪も肌も真っ白で、まるで干からびたような身体で跪くサキュバスの存在だけが、その中心に辛うじて残つていた。

魅力が一欠片もなく、そして何より結城の要素が一欠片もないサキュバス“もどき”が。

「ねえ、お願い。なんでもするから。なんでもしてあげるから。だからお願い、殺さないで」

「…………」

そんな言葉を無視して一步一歩、跪く彼女に近づく。

「嫌、来ないでよ。私はまだ、死にたくない まだ消えたくない！」

「…………」

涙を流す彼女の目の前で立ち止まり、音もなく右手を振り上げる。

「やめて、やめてよ。冗談でしょ？ 私を斬るの？ そんな刃で、そんな刃で」

流れていったことがまるで見間違いのように彼女の涙が止まり、その瞳に明確な殺意が宿つた。そして、

「そんな綺麗な刃を、この私に見せつけないでよ！」

ヒステリックに叫びながら、彼女が飛びかかってきた いや、

飛びかかるうとした。

だから、なんの躊躇いもなく、

「へえ。お前には、そう見えんのか

そう言つて、オレは結城真実を サキュバス“もどき”を斬り下ろした。

「髪はね、また何度も伸びるものなんだよ。特に女性は、あつと
いつ間に。だからその度に、誰かが切つてあげないといけないんだ
……わすがのチルチルくんでも僕の言つてること、もう分かるよね
？」

翌朝。一年生三日目。石段を降りきったところ。
いつも通りの、しつかり校則を守った制服。
いつも通りの、きっちりまとまつた三つ編み。
いつも通りの、すつきり無駄のない黒縁眼鏡。
見慣れ始めた、ぴっかり色を添える桜の花の髪留め。
そんな結城真実が、そこにいた。

「おはよ、智流くん」

「おはよ、結城」

「昨日は、ゴメンね、なんか迷惑掛けちゃって」

「別に気にすんな。それより体調とか気分とか悪くないか？」

「うん、大丈夫。智流くんチで休んだ後、気分がスッキリしてたし、
家に帰つてからもぐつすり寝たからすっごい元気」

つて私、寝過ぎだね。

と、小さく舌を出す結城。

。

「……んじゃ、全快祝いに今度の土曜、映画でも行かね？」

「あはは、全快祝いって大袈裟。でも、ちょうど見たい映画あった
んだ」

「へえ、どんなヤツ？」

「なんかね、狼男の話の映画。クラスのみんなが面白かったって
「ふうん、じやあそれにするか」

「うん。それじゃあ今度の土曜日ね

「了解……つーか、いつまでもこんなこといたり、また遅刻すんぞ

そう言つて、オレは結城の前を少し早足で歩き始める。

「あ、ちょっと待つてよ」

急いで後ろからを追つてくる結城。

だから、結城が追いつく前に、

「あ、そういうやさ

顔を見られる前に、

「言い忘れてたけど

親切なオレは教えてあげる。

「髪留め、似合つてゐる」

後日、観に行つた映画の記憶が鮮明な内に、オレは『狼男』と対戦することになるが、それはまた次の話。

第一話「VS・うんずるウルフマン」続く。

* 終 * (後書き)

以上、もどきども第一話「VS・いやがるサキュバス」でした。
腑に落ちない点も多々残していると思いますが、あくまでも一話完結“もどき”なので、ご容赦頂けるとありがたい限りです。
感想・批評など頂けると、さらに嬉しい限りです。

では、ここまで読んで頂いた方々に最大級の感謝を！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3068/>

もどきども 第一話「vs.いやがるサキュバス」

2011年1月10日00時55分発行